

---

# サイコロ ～ 婀娜骨董店 ～

送り狗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サイコロ ～婀娜骨董店～

### 【Nコード】

N2935Z

### 【作者名】

送り狗

### 【あらすじ】

ボードゲームで使う様なサイコロを振ると、1～6の選択肢が浮かんでくる

それは、自分の運命を変えたり他人の運命を変えたり、小さいのに大きな力

## 不思議な出会い（前書き）

難しい話ではありません。ですが、不思議な話ではありません。

## 不思議な出会い

私は古い骨董品屋を営んでいる。

おばあちゃんから手渡すような気軽さで譲り受けたこの骨董店を、私は気に入っている。小さい頃からよく遊びに来ていたし、この骨董店に持ち込まれる骨董品も人達もみんな変わっていた。

中でも一番変わっていると感じたのはある『サイコロ』だ。

譲り受けたその日、私は古ぼけた叩き（はたき）を使い長年溜まっていたほこりを落としていた。骨董店の中央に立っている立派な大黒柱を叩いていた時、まるで私を待っていたかのように私の手の中に落ちてきた。

落ちてきたのはボードゲームでよく使うサイコロ。光の加減で何色にも変わるそのサイコロはダイヤモンドみたいな輝きで、不思議と私の手によく馴染む。長年共に寄り添ってきたかのような安心感とよく分からない懐かしさがそのサイコロから伝わってきた。

そのサイコロを両手で包むように握り締め、私は右を向いて左を向いて、ゆっくりと両手を開き覗き込んだ。そこにはさっきと変わらずサイコロがある。でも、握り締めないで逃げていきそうな気がして私はもう一度サイコロを握り締めた。

手を離してサイコロがあるのを確認する。そして私はようやく安心することができた。

高層ビルが立ち並ぶこの現代で、忘れられた……または切り取られたかのように古い町並みのこの森北市は、もはや浮世離れしている。でも、一番浮世離れしているのは私の店だろう。

森北市の中心にある森北商店街　この一角に私が経営している骨董品屋、あだこつとうてん婀娜骨董店がひっそりと存在している。

森北商店街は、いつも賑っている。笑顔が絶えず人が行きかう。他所から来た人は、これが本当の日本の姿だという人もいれば、こんなの日本じゃないと言う。本当の日本なんてものはその人その人が思い浮かべる理想郷。いろいろあって言いと思う。

私はただ、日がな一日お客さんを待つばかり。その間に本を読んだり、骨董品を磨いたり、店の掃除をしたり、することはいっぱいある。たまにバイトに出かけ、食費とお小遣いを稼いではまたお客さんを待つ日々をすごしている。

自堕落な日々に見えるが、決してそんなわけは無い。私は時間にルーズなだけだ。私は昨日見つけた綺麗なサイコロをポケットに入れ、バイトに出かけた。

私が働いているのはメイド喫茶と呼ばれるものだ。古い喫茶店だった店を店長が流行っているからという理由で無理やりメイド喫茶に変えてしまった。反対する声は多かった（女性店員）が、いざしてみるととても繁盛してしまった。

しかもこの店での一番人気はなぜか私だった。人よりもちょっといいくらいの顔と175センチもある長身に加えて私は巨乳と呼ばれる分類に入るらしく、完璧だ！とか言われて持てはやされていた。いい気もしなければ悪い気もない。それが私だった。

私がメイド喫茶に付くと人ごみができており、店が燃えていた。店から出ている火が、天を妬き焦がそうとしているばかりに音を立て、消火活動は困難なものとなっていた。火が出ている店を見た私は開いた口が塞がらなかった。

「えっなんで？　なんでこんなことになってるの？」

私が洩らした呟きは、火が燃え盛る音でかき消されてしまう。

燃えているメイド喫茶は現在進行形で消火活動中。消防隊員が消火活動をしている間に店長を見つけたが、消防隊員に肩を貸してもらい呆然となって自分の店を見つめている。

店長に声をかけに行こうとしたが、人ごみがそれを許さない。店長がいる場所に近づくことができない私は、どうしてこうなったのか聞きたかったが聞きに行く事もできず、野次馬から少しでも情報を集めることにした。

「おいコレどうなってるんだ？ 誰か見ていたヤツはいないのか？」

「見ていたってお前……何をだよ？」

「決まってるだろう？ 俺らの憩いの場をこんな風にしたヤツをだよ！」

「待ってって！ なにも放火だって決まったわけじゃないだろう？」

「いやこれは放火に違いないね！ きっとこの店のすばらしさが分からないやつがやったに違いない！」

「……太一さん！ どうしてこんなことになったんですか？」

放火だと言い張っている男、メガネをかけている太一さんは重度のメイド喫茶中毒者だった。歳は私よりも5つも上のバリバリの社会人のはずなんだが、私が働いている店に入り浸っているせいで、今月も金欠らしい。

「あつ宵闇ちゃん！ 今日バイトだったの？ なんてタイミングが悪い、燃えるならせめて明日だったらよかったのに！」

「あはは……相変わらずですね……」

「そう！ どうしてこんなことになったのかの話なんだけど、俺は絶対放火をしたヤツがいると思うんだよね！」

「放火……ですか？」

「おい待てつて！ まだ決まってもいないのに決め付けは良くない  
つて言っているだろう？」

「原因が分かっているじゃないんですか大貴さん？」

この弘樹さんと言う人もまた、メイド喫茶の常連さんだった。優しい人だけど、いつも憂いの表情を浮かべていて、なにがあったのか訊ねても答えてくれない。でも、優しい人だ。

「そうなんだよ夕闇さん。火が大きくなるまで誰も気が付かなかったから、こつやつて口論を繰り返してはならないんだ」

「そうなんですか……」

私はそう言いながら無意識のうちにポケットに手を入れ、ポケットの中に入れてきたサイコロを弄んだ。その瞬間……私の頭の中にある記憶など全てにプロテクトがかかり、頭の中に六つの選択肢だけが浮かび上がった。

- 1、始まりに
- 2、振出し
- 3、元
- 4、過去
- 5、未来
- 6、20分前に

この中から一つを選べということらしい。が、私はわけが分からずに6番を選択していた。

「あれ？」

私はメイド喫茶の前にいた。店は燃えておらず、中からは楽しそうな音が漏れ出している。いつもと変わらない風景、いつもと変わらない賑わい。でも変わっているのは、燃えていた店が燃えていないということ。

「えっあれ？ どうして？」

私の疑問に答えてくれる人、正しい答えを持っている人はいなかった。だから私は携帯を開き、時間を確認するという選択肢を取った。時間はちょうど、私が店に着いた時間の20分前だった。

「えっ時間が……戻ってる？……」

信じられない出来事だった。でも、そうじゃないと納得できないし、時間が戻っていると考えれば納得できる。メイド喫茶が燃えていないことも時間が20分も戻っていることも。

どうしてこうなったのかは分からないが、原因は分かる。あの頭の中に浮かんできた六つの選択肢のせいだ。選択肢がどういう条件で働いたのかは分からない。でも、そのおかげで私は時間を旅行し20分前に来たのだ。

「20分前に戻ったけど、今は店が燃えていないってことはこれから店が燃えるってことだよな？」

私はそう自問自答し、これはどういう意味なのかを理解した。

私はこれから店が燃えるのを食い止めなくてはいけないらしい。

## 不思議な出会い（後書き）

この作品は前に書いていたサイコロという話を、まったく新しく別のものに書いたお話です。

ですが、サイコロを使って物語が進んでいくというところは変わりません。

もし良かったら、参考にするので感想を頂くとうれしいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2935z/>

---

サイコロ ~ 婀娜骨董店 ~

2011年12月10日12時45分発行